田原坂

年刊
Tabaruzaka
Vol.9

特集「田原坂の戦い」を考える

戦いはいかにして起きたか？
何故、激戦となったのか？

新しく生きよう。
NEO ONE
KUMAMOTO

©樫木成香

特集「田原坂の戦い」を考える

明治十年（一八七七）三月四日～二〇日の十七日間、昼夜にわたり戦闘が繰り広げられた田原坂の戦い。

西南戦争といえば、まずはこの戦いを想起する人は多いだろう。

言うまでもなく最大の激戦であったためで、七ケ月に及ぶ西南戦争のうち十七日間に過ぎないこの戦いに、政府軍はのべ最大八万人を投入、戦死者は全体の約四分の一にあたる約一七〇〇名に上った（薩摩軍は不明だが相当の死者数だったと考えられる）。

「全役ヲ終ルマテ、其死傷ノ尤夥キハ、田原ロナリトス」

（明治十年征討軍団記事）

田原坂の戦いはいかにして起きたのか・・・

なぜ激戦となったのか・・・

本号では、改めてこの戦いを考えていく。

【表紙】新キャラクター　―田原坂の美少年たち―

ある者は傷つき、ある者はあたら若い命を散らしながらも、己の「義」を貫いた少年兵たち。今・・・影向の松の前に集った彼らは、確かに歴史の体現者なのだ。

（画　樫木成香）

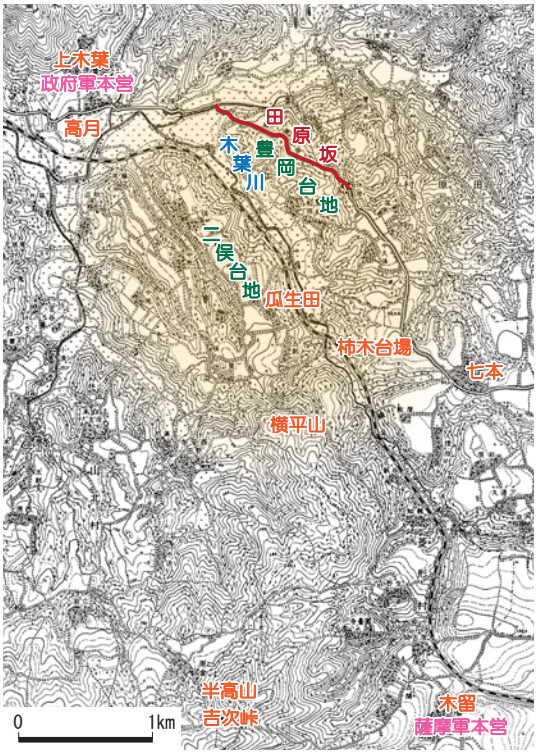
▲古写真 北西から田原坂を望む

手前の豊岡の眼鏡橋が政府軍攻撃の基点となった。薩摩軍が陣を構えた坂上の三ノ坂や台地上は樹木に覆われて見えない。

▲古写真 三ノ坂から二ノ坂を見る

「電線柱及ヒ樹身ハ彈丸ノ痕跡蜂ノ巣ノ如ク、或ハ中央ヨリ摧折シタル者アリ」

（征西戦記稿）



▲田原坂の地形と戦場の範囲

田原坂本道だけではなく東西約３㎞、南北約９㎞の範囲が戦場となった。

※明治33年（1900）陸地測量部地図に加筆

戦場の範囲

坂の戦いというけれど・・・

田原坂は、本道の長さ一一六〇ｍ・比高差九〇ｍ・道幅四ｍを測る掘り抜きの坂道である。緩やかな屈曲点を境に下から一ノ坂・二ノ坂・三ノ坂と呼ばれる。

政府軍にとってはこの坂を突破して熊本城への連絡・救援を果たせるか、薩摩軍にとってはこれを阻止できるかが戦いの主題であった。

そのため、薩摩軍は田原坂が通る豊岡台地に、政府軍は谷を挟んだ対岸の二俣台地に陣を構えた。田原坂をめぐる周辺一帯が戦場となったのである。

なぜ田原坂だったのか

ルートから考える

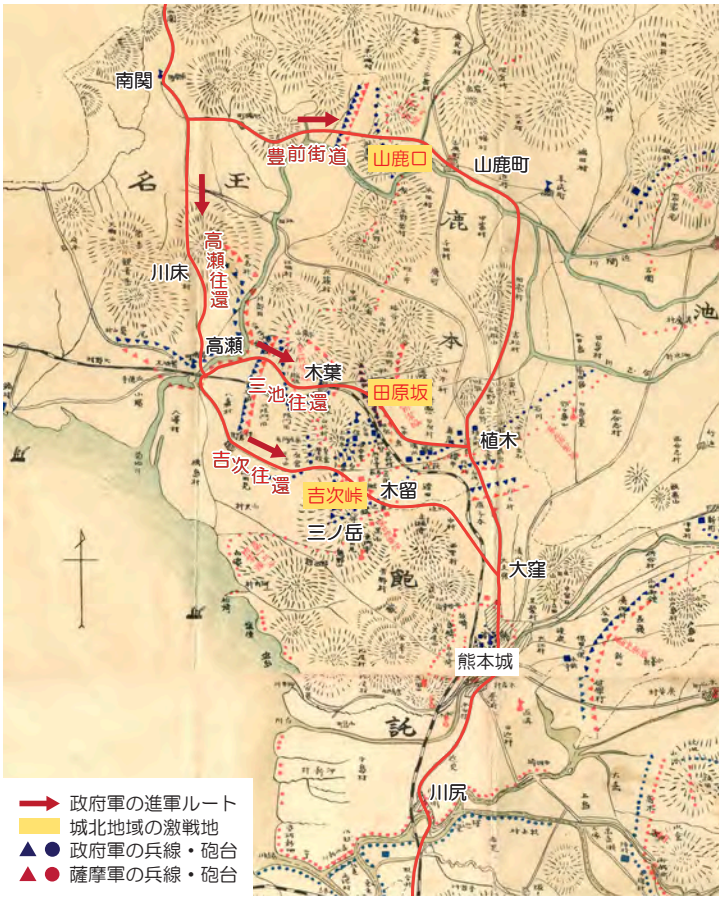
政府軍旅団が小倉や博多から陸路南下する主なルートには、豊前街道・三池往還・吉次往還の三道があった。

二月二十五～二十七日の高瀬の戦い後、薩摩軍は三道の要地、山鹿口・田原坂・吉次峠を拠点として防衛ラインを築く。そのいずれもが激戦地となった。特に田原坂は、防衛ライン中央に位置する最重要地であった。

熊本城救援を急ぐ政府軍旅団は、比較的坂が少なく道幅が広い三池往還ルートに多数を投入し、これを崩さんとしたのである。

「田原坂ハ田原ノ嶮ヲ抜クトキハ熊本城マテ漸向坂ノ嶮一ツ有而已ナリ、是非田原口より進撃スルノ外有之間敷」

（軍事報告―志方検事外一名ヨリ山田司法大輔宛田原坂戦報）



▲主要街道と激戦地

※明治42年（1909）「明治十年戦役址図前編」に加筆

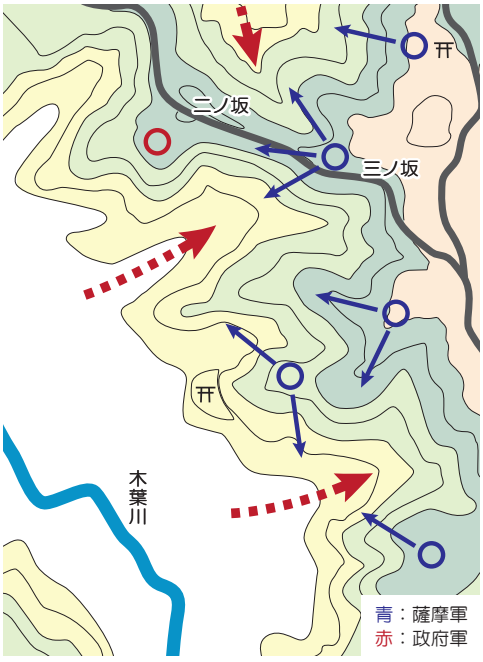
地形から考える

三池往還ルートには唯一ともいえる難所があった。田原坂である。

「一夫之を守れば、三軍も行くべからざる地勢たり」（参軍 山縣有朋）

田原坂が通る豊岡台地は急斜面が多く、小さな谷が複雑に入り込んで守るに堅く、また樹木が繁って身を隠しやすい・・・

薩摩軍は要害の地となるこの一帯に拠り、政府軍を迎え撃ったのだった。



▲二ノ坂・三ノ坂付近の地形模式図

谷筋から攻め上がってくる政府軍。薩摩軍は複雑な地形を利用し、張り出した台地の両側から十字火を浴びせることができた。

▼三ノ坂口を下から見上げる

政府軍は後方から弾幕を張りつつ、この急斜面を吶喊して駆け上った。恐ろしくて声を張り上げずにはいられなかったであろう。

中世人も注目していた要害

中世城があった？

田原坂が通る豊岡台地。ここには中世の山城（田原城）があったと考えられている。

遺構は不明瞭だが、北側の高所には「城山」・「西の門」・「高見」・「殿の屋敷」などの小字名が残り、この地へ上る細い掘り抜き道は地元で「城山道」と通称されている。

その他の箇所でも中世の遺跡は多く、発掘調査において小規模な堀跡が検出され、また貴重な中国の輸入陶磁器（青磁・白磁）が出土するなど、台地一帯において有力者（在地領主層）の関与がうかがわれる。

もちろん、薩摩軍はそのことを知らなかったであろうが・・・中世人が蟠踞したこの要害の地を、奇しくも陣に選んだのである。

▲中国龍泉窯の青磁椀（13世紀）

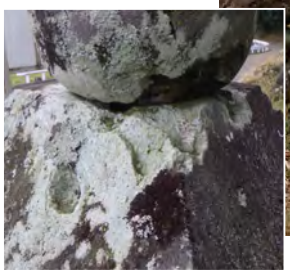
▲熊野座神社脇の凹道

中世の堀跡あるいは切岸跡と推定されている。

お寺もあった

激しい銃撃戦による多数の弾痕が残る田原の五輪塔。「建治三年（一二七七）」・「田原寺」の銘があり、付近に浄土宗寺院の存在が想定されている。

四面に阿弥陀如来の梵字（キリーク）



▲田原の五輪塔と弾痕

▲主要遺構配置図

発見！田原坂工事の飯場か

田原坂は加藤清正が熊本城北方の防衛のために修築したといわれている。

坂を上りきった場所（現在の田原坂西南戦争資料館）の舟底遺跡発掘調査区では、戦国時代末～江戸時代初期の簡易な掘立柱建物群などが検出された。

ごく短期間の使用とみられ、田原坂の修築工事に関わった工人たちの飯場と考えられている。

▲火鉢を据えて暖をとった穴

▲上空写真（南から）

▲豊岡台地の中世遺跡

中世遺跡は台地上の平坦面ほぼ一帯を占め、石造物も広く分布している。中世遺跡の範囲と薩摩軍の主要陣地の推定位置がほぼ一致している点が注目される。

そして激戦となった

乃木が予想していた田原坂の激戦

乃木希典少佐が率いた小倉第十四連隊。向坂の手痛い敗戦後の2月26日、田原坂に着目する。

「田原坂ノ要地ヲ占メ高昂ノ地勢ニ據リ賊ヲ目下ニ聚メ俯瞰シテ戰ハ、蓋シ其功ヲ奏スル」

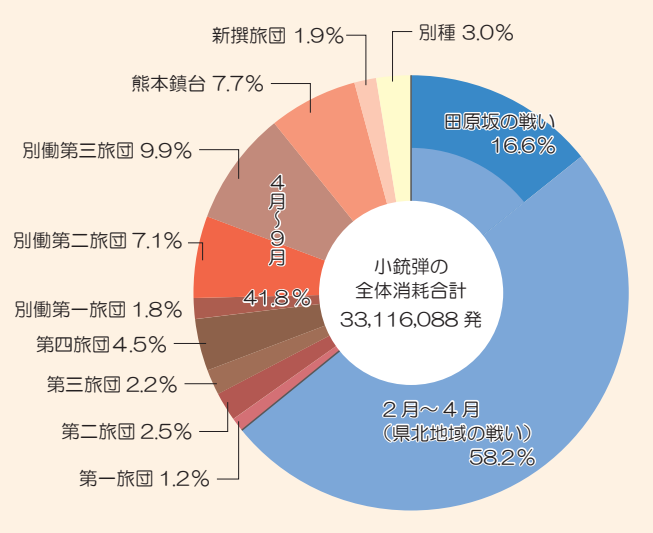
（征西戦記稿）

田原坂は戦略的に優れた要地であり、ここを薩摩軍に奪われれば二度と占有できないとするが、この進言は、第二旅団長三好重臣少将により却下され、厳命を受け撤退することとなる。

乃木の予想は的中してしまったのだ。

▲乃木希典少佐

▲三好重臣少将



▲政府軍の弾薬消費数の割合

青系色の部分が熊本城連絡までの第一・第二・第三旅団の消費。２月～４月は旅団ごとの数が集計されていない。激戦による混乱か。

弾薬消費数

激戦を示すのは戦死者数だけではない。政府軍の弾薬消費数（砲弾を含む）からも看て取れる。

田原坂の戦い十七日間の消費数は五四八万発、一日平均約三二万発である。戦争全体の消費数の二割弱が田原坂一箇所に集中しているのだ。

また、約六割が田原坂を含む熊本県北地域の五十日間で消費されており、一帯での戦闘がいかに激烈であったかが分かる。

この頃、銃弾不足により進攻作戦の変更が検討されたほどで、増産・輸入などによりこれを賄ったという。

会計部長が見た激戦

第一旅団会計部長川口武定の日記「従征日記」。目の当りにした両軍必死の激戦の様子を記している。

政府軍「飛弾霰集、進ム者ハ必ス傷キ、退ク者ハ必ス斃ル」

薩摩軍「保壘ヲ其要衝ニ築キ、碁布星羅、互ニ掎角ノ勢ヲ成シ」

※「碁布星羅・掎角」…碁石や星のように連なったり、散らばったりして、前後から挟んで攻めること。

陥落後の戦場「賊屍ノ積畢・・（凄惨な表現のため略）・・筆紙ノ能ク盡ス可ニ非サルナリ」「人間現世ノ意思ヲ爲サス」

地元の十一歳の少年「兵火の旺盛ナルトニ驚悸シ、精神ヲ喪ヒタルヤ・・呼吸將ニ絶エントスルカ如シ」

▲『従征日記』と３月14日の写生画

「弾丸ノ下ヲ潜リテ百四名ノ死體ヲ集メタリ、然レトモ皆七八日間雨露ニ触レ、炎日ニ爆シタル…」

なぜ激戦となったのか？

物量に勝る政府軍。精強を謳われ、そして要害に拠った薩摩軍。しかし、それだけではない。様々な要素が薩摩軍に利し、それが政府軍を攻めあぐねさせる結果となった。激戦の理由を考える。

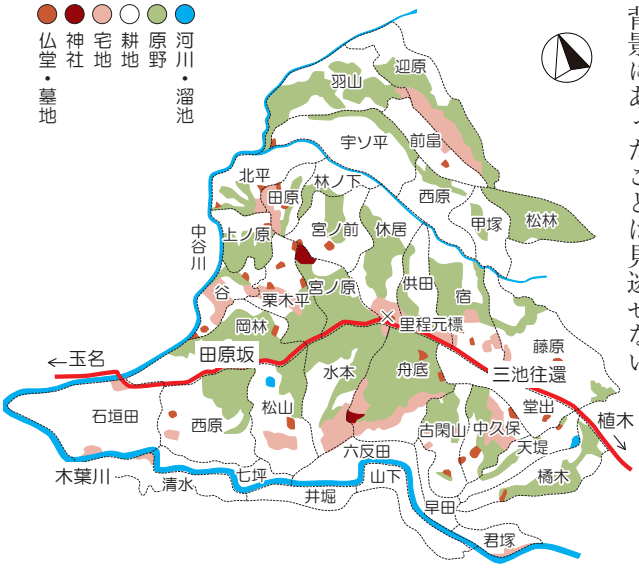
インフラから考える

田原坂防衛のために薩摩軍が拠った豊岡台地。明治初年に編纂が開始された郡村図「山本郡 豊岡村」を見ると・・・

豊岡村には宅地や耕地が多く、糧食や物資の現地調達（住民からすれば簒奪）が容易であったし、時には屋内での休息もできた。畑の畦を防塁として利用していた可能性も高い。

また、村を貫通する三池往還などの道路も整備されており、兵員の移動や物資輸送にも適していた。

薩摩軍が十七日間の激戦を続けられたのには、こうしたインフラが背景にあったことは見逃せない。



▲郡村図「山本郡 豊岡村」を再トレース

天気から考える

「雨は降る降る　じんばは濡れる」

民謡田原坂にも謡われたように、三月四日～二十日の戦闘十七日間のうち六日は雨であった。

政府軍は主力となるべき二俣台地からの砲撃が雨でかすんで、目標の視準・戦果確認が難しく、雨天では歩兵戦を主体とせざるを得なかった。

その歩兵戦にしても斜面を攻め上る際、雨中での仰射は困難であったろうし、草鞋を履いていても足元は滑りやすかったであろう。

田原坂の雨・・・むしろ薩摩軍に利したと考えられる。

※「薩摩軍＝木綿の和装＝雨が滲みて不利」という単純化した考えは、近年の研究では否定されている。

日付	天気
4日	後
5日	
6日	
7日	
8日	
9日	
10日	後
11日	
12日	後
13日	
14日	
15日	
16日	
17日	
18日	
19日	後
20日	

▲雨に煙る豊岡台地

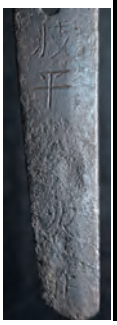
二俣瓜生田の政府軍砲台から豊岡台地を望む。当時の砲撃は目視で着弾確認を繰返しながら目標に近づき命中させるものだった。雨天では敵の位置や戦果を確認することが難しかった。

薩摩軍の戦術から考える

薩摩軍の抜刀攻撃。銃砲戦たけなわの時に忽然と現れての乱撃は、その場での勝ち以上に政府軍兵卒の戦意喪失に効果絶大であった。

幼い頃より日本刀の鍛錬を重ねてきた薩摩士族兵と軍隊に入るまで銃や刀の扱い方を知らなかった政府軍庶民兵とでは、白兵戦で大きな差が出るのは当然だった。

政府軍はこれに対抗するため、刀技に優れた者を選抜し、警視抜刀隊を組織したのだった。



▲薩摩刀「波平」

室町時代。薩摩軍使用か。

弁刊 田原坂 2023年[Vol. 9] 2023年3月第1版
田原坂西南戦争資料館展示案内
発行 熊本市文化財課

熊本市 連携事業のご紹介 玉東町

明治10年、「田原坂の戦い」の戦場となった熊本市と玉名郡玉東町は、ともに西南戦争遺跡の保護と活用に取り組み、「西南戦争歴史講座」を共同開催しています。

未来に誇る、熊本の軌跡。
熊本遺産 KUMAMOTO HERITAGE

西南戦争歴史講座（近年の開催内容）
　年4～5回の座学：様々な視点から西南戦争を取り上げ、毎回、専門分野の研究者が講師をつとめます。
　年2回のウォーキング：熊本県内の西南戦争戦跡を歩きます。
※平成22年度から毎年開催しています。

座学

ウォーキング

▲コロナ禍でも多くの方々に参加していただいています。

●開催要項は、ポスター・チラシ、国指定史跡西南戦争遺跡ホームページ（https://seinansensou.jp）にてお知らせします。

▼ポスター・チラシの一例（令和4年度）

熊本市田原坂西南戦争資料館

利用案内

■ 開館時間　9:00 ～ 17:00（入館は 16:30 まで）

■ 入館料
一般（高校生以上）個人 300 円　団体（20 名以上）240 円
小・中学生　　個人 100 円　団体（20 名以上）　80 円

■ 休館日　12 月 29 日から翌年 1 月 3 日まで

ただし乳幼児、障害者手帳をお持ちの方、熊本市・鹿児島市・福岡市・北九州市に居住する 65 歳以上の方（証明できるものを提示）と同市内の小・中学生（名札か生徒手帳提示）等の入場は無料です。

お問い合わせ

熊本市文化財課植木分室
〒 861-0195 熊本市北区植木町岩野 238 番地 1
☎ 096-272-0551

熊本市田原坂西南戦争資料館
〒 861-0163 熊本市北区植木町豊岡 858 番地 1
☎ 096-272-4982

雑誌1877-03 定価0円
1002190924
030420